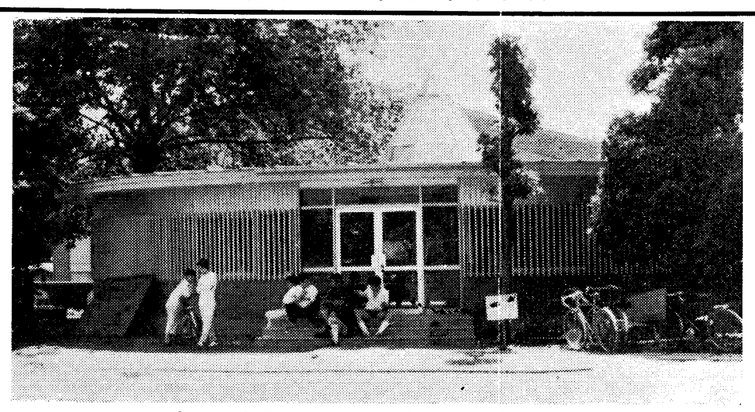
同窓会報

発行所
都立大学附属高校同窓会
東京都目黒区八雲1—1—2
発行人　萩野　宏
編集責任者　瀬崎　能信

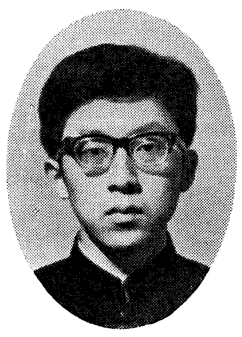


自治会館建つ

あなたがふと母校を訪れた時、あの思い出深いプラタナスの木の下に円いおかしな建物がちょこなんと座りこんでいるのを御覧になったことがありませんか。あの中であなたの後輩たち、あまり良からぬ連中がもそもそとたむろして、何やら話しに花を咲かせているのだそうでございます。あなたもちょっと中に入ってみませんか。連中意外に歓迎してくれますよ。そして円いのの隣りにできたもう一つの円いのを応援してあげようではありませんか。

初めまして

同窓会委員長　萩野　宏（14期）



僕が木村さん（13期）から同窓会の委員長を引き継いだのはちょうど記念祭の時でした。在校当時自治会関係の仕事をしていた訳でもなく、この様な仕事に携わるのは全く初めてなので、最初はどうなることかと心配でしたが、委員長になって半年経った今、良き先輩や友人達のあたたかい助言や協力でやっと仕事に慣れてきたというところです。僕が委員長になって感じた事は、現在都高の同窓会は学習会の他には会報の発行と三年に一度の名簿の作成をするだけで、その活動があまりにも不活発ではないかという事です。学習会においてすらもこれに参加するOB・OGは二十人位。しかも高校を卒業してせいぜい三年までのOB・OGというのが現状です。これでは同窓会の仕事というにはあまりにも寂しいし大学の勉強が忙しくなったり就職したりすると学習会から離れていくのでは学習会の発展も望めません。ですから既に社会に出ている方達も日曜日などには学習会にやってきて自分の後輩達と討論したりして積極的に学習会に参加し同窓会員同士縦の繋がりを深めるのも有意義なことだと思います。そうすれば学習会も発展し、また同窓会も大いに発展すると思います。

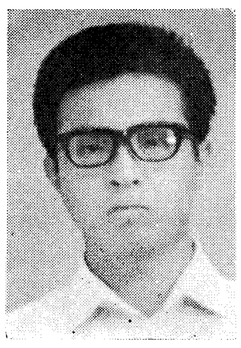
同窓会の行う行事に参加する人達が限られているという事の他に同窓会の発展を妨げる要因として、同窓会の部屋がないという事があると思います。現在は生物室の片隅に間借りをしている様な状態で金庫が一つあるきり。あとは学習会の記録などダンボール箱に山積みしているのが現状です。これではいつまでたっても同窓会の発展は望めませんし、いつまでも斉、深民両先生の御好意に甘えていてはいけないと思います。今でも相当御迷惑をおかけしているのですから。こんな訳で同窓会の部屋が早く欲しいのですが、部屋を作ろうにも資金がありませんし、第一土地がありません。ですから学校に部屋を下さいとお願いしているのですが、空いている所は一つもないということでして、何時になったら同窓会の部屋が出来るのかわかりません。どなたか妙案はないものでしょうか。

僕が都高を卒業してからまだ二年にしかならないのに、大きな体育館が出来たり、自治会館が出来たり、また大学の校舎が新築されてグラウンドが非常に狭くなったりして都高の環境は大きく変りました。また在校生の気風もかなり変っているのではないかと思います。こんな中で同窓会が浮き上ってしまうのを防ぐためにも私達は積極的に在校生と接触し現在の高校とのつながりを一層深める必要があると思います。一クラスに二人いる委員の方は同窓会委員会の時だけの委員ではなく、また会員の皆さんも総会の時だけの会員でいないで現在の都高をしっかりと把握して下さい。それが即ち同窓会の発展につながると思います。

同期の友人達や同じクラブの先輩後輩達にしか知られていない委員長の僕の切なる願いは、何とかして同窓会が今の低迷の状態から脱け出し、発展して欲しいということです。そしてそれが僕の抱負でもあるわけです。僕はこういう仕事には全く未熟ですので先生方や諸先輩の御指導を仰ぎ、僕の短い任期をより良いものにしていこうと思っています。どうかよろしくお願いします。

一ヵ月の感想

中田俊夫



本校の目標にも強く打ち出してある如く、生徒が各々、自律を基礎として、個人の尊重と秩序を守って、自由で解放的な気持で、真剣に学校生活と取り組んでいる点、まことにうらやましい限りである。又、規則に縛られる事が他の高校に比べて相当少ないと思うが、この事実は、教師—生徒各々の結束と相互の信頼が、いかに強いかの現れとして、大変好しく感じられる。教師として、これ等構成の一員に加わる私の責任と立場を、深く感ずると共に、更に優れたものに完成させたい気持である。

高校生活というイメージは、私の場合、昭和34年当時の入試地獄であったため、いわゆる「灰色の人生」の念が強いが、当時私としては相当反撥も感じた事もあったが、結局、この生活が一つの人生試練の一期間であり、これを全うする事で、人間としての成長も一歩前進するものと決意し、確信にまで至らしめた事に気づいている。

社会の要求は、大なり小なり人道的或は哲学的立場から不自然な事を強いる場合が数多い。こうした社会の一員として生活しなければならないため、その訓練所としての高校課程のあり方、特に色々な制約にも矛盾が目立つ場合があると思う。しかし何千年かの歴史を経て作り出した大先輩達の弛ぬ経験からの自信の表示として、これを受け入れる謙遜さも、考慮する必要が十分あるように思われる。もちろん盲目であってはいけないが。

最近行なわれたクラスマッチも感激的に終了し、あらためて自主的活動の意義深い事実に感銘した。次期の学校行事が楽しみである。

都高を去るにあたって

片山　徹

かねてから適当な時機に若い方にバトンを渡したいと思っていましたが、昨年の秋でわたしも還暦に達したし、この三月にはわたしが学年主任をしていた諸君が卒業したのでこの機会にわたしも学校を卒業することにしました。

わたしが都大附属高校の前身府立高等学校に赴任したのは昭和十七年ですがその前四年間は九州の佐賀高等学校で教えましたから、旧制からの新制にかけて相当長い年月高校に終始したことになります。わたしが高校の名に愛着をもつのは、わたし自身、岡山の六高時代にすぐれた先生に接して——三谷隆正先生や山岡望先生のことは諸君にもお話したと思います——高校の教師ほどよい職業はないと若い頃から思いこんだためです。そして高校を続けてきたことを、後悔したことはありません。

三谷隆正先生は昭和十九年に亡くなりましたが、先生の一高時代からの親友南原繁先生の編集で、死後二十二年目に岩波書店から全集が刊行されました。わたしが学校をやめる時機と偶然にも一致しましたが、わたしには天の助けで、学校へのよい置きみやげが出来たと思って図書館に寄贈しました。それは自分が伝えたいと思いながら十分に伝え得なかった精神を、この全集を読む人には知ってもらえると思ったからです。

二十数年も学校にいて、業績というほどのものは何もありませんが、それでも心のすみでは、蒔いた種はいつか芽が出ることもあろうと楽しみにもしています。いまはすっかり自由の身になって、毎朝の散歩をエンジョイしています。人影の少ない武蔵関公園の池の畔を歩くひとときは、わたしにとって思索のひとときでもあります。これからは学生時代から続けてきた聖書の勉強に全力を傾けます。わたしにとってこれほど興味深い書物はありません。時には物理の勉強もしましょうが、それは頭の休養に役立つでしょう。聖書から学んだ真理すなわちキリストの自由の福音を求める人に静かに伝えること、これがこれからのわたしの楽しい仕事です。皆さんのご健勝を祈ります。

八雲ヶ丘に四年間通って

小林澄子（15期）

生協の片隅で夕飯を食べていると、後から大きな声が聞こえてきました。「我々青年は未来に……」随分息まいているわいと思いながら振り返ってみると、附高生が十人近く頭をよせあって話し合っていました。「受験だからといって……」このような光景はよく見かけます。クラブについての真剣な討論、記念祭について、政治について等々、話の断片を聞く度に、何かしら附高らしさを感じます。よく話をしている点では私達の頃よりも盛んな様です。しかし若さの溢れた頼もしさと同時にある種の不安も覚えるのです。私が大学に入ってセツル活動を始め、いろいろ新しいことにぶつかる度に、私の高校時代の生活を思い出します。確かにいろいろ考え悩みました。しかしそれがいつも十分出しきれなかったような気がします。勿論、私の性格も大いに関係しているとは思うのですが、高校生活を何かしら不満足に終らせる原因が社会の問題を云々する前に、あったのではないかと考えます。私の不満足が疑問として現れた一つに「いわゆる政治活動をやっている人々は自分の問題として、どの程度とらえているのだろうか？」がありました。私自身、政治問題を考えても、それは私の生活とは離れた所でしか考えられなかったのです。こんな疑問が更に発展して「肌からにじみ出るような考えをもちたい」になり、セツルメント活動に飛び込んでいったのは、二、三年セツラーの魅力でした。私のそれまでの人生でお目にかかったことのないような人間—特に受験期の孤独？から解放された為もあったでしょうが—他人のことを親身になって一緒に考えてくれるお互に厳しい批判をして高めあおうとしている…。こんな人間とセツル活動を通して政治について話す時、私は全く抵抗を感じませんでした。「附高に欠けていたものはこれなんだ！」とその頃考えました。「一人一人が普段の生活でどのようなことを考え、どのようなことを考え、どのようなことを悩んでいるのか、つまり具体的な触れ合いを感じ、人間を信じる喜びを確かめつつ認識を深め、成長していく…その中で政治についても考えていくのであって、ただ形式的に情勢下の問題は云々という話し合いのみに終ってしまっては、かえって学生の間の離反は深まる一方であろう」と。現に一見ニヒルな風を装い、何かに抵抗しているのだろうが、その何かが常に曖昧である学生、一直線に受験コースをつっ走る学生などが出現？伝統ある附高生タイプは消えつつあるのではないでしょうか？私達とは違った教育を受けてきている中学生、そして増々厳しくなっている情勢を考える時、在校生が考えてみることは極めて重要だと思います。伝統ある附高生タイプは否定して新しい附高を作っていきましょう。それとも今作りつつあるのでしょうか？

◇総会報告◇

例年どおり同窓会総会が記念祭最終日（十月二四日）六時すぎから大学講堂で開かれた。総会前、講堂入口には同窓生が三々五々たむろし、近況報告やら、誰かの噂やら、先生方と歓談やら、これ又例年どおり薄闇の中での情景であった。閉会式後直ちに総会に入った。今回はこれまでと異なり、秋に新聞発行ができなかったので葉書の連絡のためか、いつもより出席は悪かったようである。

まず前委員長の木村君（13期）が司会になり、同窓会顧問が斎先生から綱島先生に替られた事の紹介があり、斎先生にこれまでの御助力に対し感謝の意が述べられた。会計報告は丸山さん（10期）から行なわれた。新聞発行ができなかったために、報告の詳細はあらためて次回の新聞紙上に掲載されるという事態になったが、拍手で決算報告が承認された。次いで活動報告が水谷君（13期）から行なわれた。報告の内容は主として、学習会の実施（春、夏休暇中）、新聞発行、新入生に都立歌集の配布等であった。

同窓会役員の交代の紹介が行なわれる予定であったが、新旧役員の連絡がうまく行かず、結局、総会では発表する事ができなかった。これについては次回の新聞紙上で紹介される事となった。

総会後、各同窓生はそれぞれに別れ、クラス会にうつるもの、ファイヤーの輪の中に入って歌い踊り、あげくのはては、磨いてきた靴を泥だらけにするもの、さっそく旧き悪友と飲みに行くものと、これ又例年どおりだったようである。ともかく今回は出席者が少なかったので次回は是非とも多数の出席をと望む声が同窓生の間では強かった。

◆新役員紹介◆

次の様に41年度役員が決定しましたので、お知らせ致します。

会長　萩野　宏（14期）
会計　林　文子（14期）
書記　海老塚　豊（14期）
　　瀬崎　能信（15期）

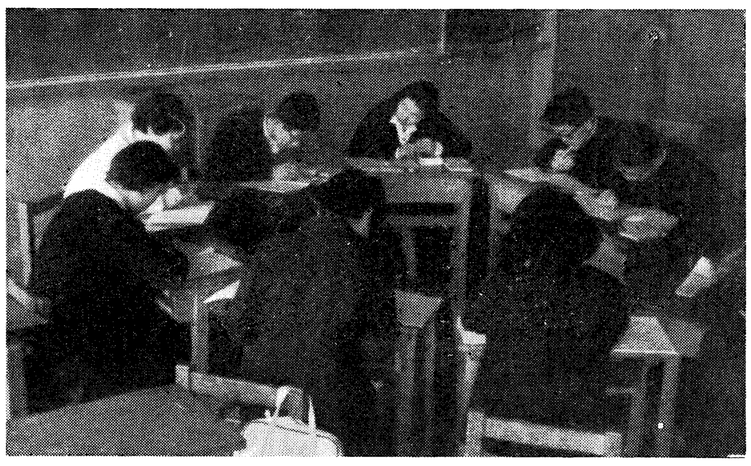
学習会新たに発展

14期　池田雅彦

第四回学習会は三月十六日から二十日まで附属高校において開かれた。十九日は終業式、二十四日は補欠試験のため休みとしたので実質は八日間であった。四回目ともなると生徒には目新しさがなくなるためか、また講師側がマンネリ化したためか、生徒の参加が八十名という小さなものになってしまった。ここに第四回学習会について書いてみようと思う。

学習会の概要

対象は今までどうり一、二年の希望者で会費は一人百五十円と第三回のままとした。この会費はプリント代、講師の交通費、雑費などにあて、講師は無報償であった。また授業は七十五分三時限とし二時限目は統一のあき時間としてスポーツ、歌声、話し合い、講演会などを行った。このあき時間の企画は主に生徒側がやった。これは学習会をOBと生徒がやっていくという面で、多少の不手際はあったにしろ、前進であったと思う。科目は初め今までの形式を越えて、読書会形式にしようとしたが、学習会の目的や生徒の希望などから、長期にわたる話し合いの結果、今までどおりの形式となった。しかしその中で生徒の希望する「自主的な学習」ができるような方向での教材を各講師は選んでいった。英語の「クリトン」などは考えるという方向を出してよかったと思われる。たとえ日本語で考えたという点があっても。数学では生徒数の不足で、クラスをいっしょにしたりしたため、教材を作りかえたりしていた。全体に生徒数が少なかったためか、かなりうまく教材は選ばれていたと思われる。しかしここで考えさせられるのは単に教材の選択よりも、それを教える、またそのクラス内のグループ作りの技術も大切に思われたことです。後半になってやっとその話しが反省会（毎日授業が終ってから、講師間で開かれた）で出て来たが、もう少し早くからその話しをみなですべきであったと思う。また、その話しができる程の講師間の雰囲気作り（組織化）が必要であったと痛感した。



新しい授業形式―複数講師制―

授業形式はほとんど従来通り、ゼミナール形式であった。今回は統一のあき時間を作るために全生徒の授業を一時限と三時限ですませねばならないので、今までのように一クラス十人程度では無理なので一クラス二十人程度としそのかわり講師を二人にした。

「講師」を複数にしたことによって講師の個人差がなくなる、色々な講師といっしょに学習できる等から生徒側・講師側ともにたいへん好評でした。この形式は講師の人数がゆるされる限り続けたらいいと思われる。

読書会―新しい方向―と物理―講師の専門を生かす―

科目は、英語、数学、読書会、物理、化学、物理実験などであった。ここで先に述べた読書会（研究会的）な要素を加える試みで新たに入った読書会と講師の専門を生かす事で入った物理について述べたいと思う。読書会は、学習会の本来の―理想の―像である。生徒とOBの交流をどの程度まで求めているかのバロメーター的なものとして新たに入れられたわけです。今回は国語を中心としたものでした。これは国語という教科がその枠を越しやすいからです。生徒の反響はかなりあったとのことです。次に物理はOBが大学で自分の専門を学んでそれなりに感じたことをやるわけです。これはよくいわれるOB→生徒の一方通行でなく、感じたことをやってみて、それを別な角度から見ることができるし重要な、貴重な経験であると思うので今後大いにやるべきであろう。

今後の問題点について

これは同窓会報第八号にも指摘されていることですが、講師の負担が大きいため（時期的に、期間的に）、出られる人が一部の人たちに限られてしまうことです。しかしこれは学習会の午後の一日だけでも各講師の専門などについての講演会のような事をやることによってある程度改善できると思われる。

次に昼食の問題であるが、これはいつも昼食のため午前と午後が切れてしまって生徒が帰ってしまったりする。これは軽い食事（パン等）を生徒といっしょにすることによって解消できるかもしれない。

「昭和二十四年新学制の下で発足した都立大学及び附属高校は小規模なもので、府立高校時代の影響を強くもっていたが、現在は定員の大幅増加などで質、量ともに拡大した。この様な条件の変化の中で大学と高校との関係が疎遠になってきている。これをもっと緊密にする必要があるのではないか。また大規模化に伴い校長の職務が増し、現在の校長、教授兼任のやり方には無理が生じているから、専任校長の設置など新構想のシステム改善を図るべきである。この様な事情を同窓生は理解し協力して欲しい。さらに都高の自由でのびのびした気風は良いものだが、これは精神上のもので、教育上の、他高とは違った特別な面として主張できるような実体はなく、やはり一般と同じライン上、枠内にあるのではなかろうか。」

おわりに

おわりに閉講式のとき秋山君が「小ちゃな建設」と「小ちゃな破壊」はどちらも小さいが「小ちゃな建設」の方がはるかにむずかしい。でも僕たちはそれをやらなければならない、と言った。そして、この「小ちゃな建設」は一人や数人では決してできない事です。ぜひ、あなたが学習会に参加する事をおわりに希望します。

第4回学習会講師氏名（敬称略）

13期　水谷　四郎　小山　光代　佐藤　和夫　佐々田泰彦　沢田　実　牧原　憲夫　森田　尚人　鈴木銀次郎　今井　忠　横山　節雄
14期　高木　茂　三田　英郎　朝倉　幸子　長谷川政明　幸村多加志　坂野　博和　秋山清太郎　萩野　宏　星　徹　森　季一　美間坂立国　野村　俊子　池田　雅彦
15期　大蔵ひろみ　寺田　治子　石川　清　瀬崎　能信　平岡　年雄　小山　徹
16期　北村　創

校長先生かわる

都立大教授　小場瀬卓三先生に

長い間附属高校の校長を務めていらした永倉俊充先生は、五月を最後に、都立大学教授としてのお仕事に専念されることになり、かわって同じ都立大学教授で人文学部長をしていらっしゃる小場瀬卓三先生が新校長として就任されることになりました。

先生は東大仏文科を御卒業後、フランス政府招聘留学生として渡仏され、帰国後都立大学に籍を置かれ、御専門としてモリエール、ディドロー研究などをなさっているそうです。

先生は新校長になられるにあたって現在の都高の抱えている諸問題について次の様に語っていらっしゃいました。

教員異動

退職

片山徹先生　物理科

転任

山際巌先生　英語科　東海大へ

田中梢先生　体育科　立正短大へ

また学習会はその性格上講師、生徒側ともに組織化することが必要です。これについて今回ははっきりとした解答が出なかったがぜひ解決しなければならないことです。

新任

中田俊夫先生　物理科　一般会社から

本吉倪先生　英語科　大学院から

前沢捷子先生　体育科　文京高校から

名簿のお知らせ

六六年度版同窓生名簿を作製致しますので、住所変更、改姓などがございましたら至急左記宛に御連絡下さい。

東京都目黒区八雲一―一―二
都立大学附属高校同窓会

会計報告

（昭和39年10月1日から昭和40年9月30日まで）

収入	（単位円）
前年度くりこし	453,895
39年度卒業生同窓会費	227,332
銀行預金利息	10,883
歌集売あげ	1,170
生物部OBより返金	10,000
合計	703,280

支出	
38年夏の学習会援助（同窓会報7号では未報告）	9,390
同窓会報7号発行及び郵送費	39,185
名簿補正カード作成のための諸費用	14,955
同窓会委員会招集費	200
39年春の学習会援助	20,000
用務員林シズエさんにお礼（アルバム）	2,000
同窓会報8号発行及び郵送費	67,600
都立歌集作成費	23,540
40年総会通知状作成費	10,620
記念祭プログラム代援助	30,000
事務手数料	10,000
領収書、切手	50
合計	227,540
残高	475,740

（丸山鶴代）

◇編集後記◇

同窓会とは奇妙なものである。僕らの日常の意識に浮かんでくることなどめったにないのに、それが忽然と姿を現してくると、どうにも払いのけることのできない重味を感じる。僕らの思い出の重味なのだろうか、ノスタルジヤの重味なのだろうか。僕らにとって過去の断面、瞬間はもうすでに薄桃色のヴェールの下に堅い果実のように包まれている。生きるということがこの果実をどれだけ沢山摘みとるかということであるならば高校時代に僕らが摘みとった果実はあまりに豊かで甘美であった。時には青々と未熟で柔い歯には酸味のききすぎたものもあったのだが。

しかしそれらも、時の流れに従って、やはり豊かに、僕らの心の中で、いまはもう熟している。先の仮定にたてばこれらの果実を土塊の中に埋めてしまうことは、僕らの生きる意味を否定してしまうことになる。

かくして僕らは同窓会報編集の仕事を仰せつかったとき断りきれない羽目になった。（編集員一同）

反逆型逸脱者

喜多迅鷹

私は数日前、一人の卒業生に出会った。何年かかって東大に入り、そしてついに東大生であることに安住できなかった男、思えば東大に入ること自体がすでに何かに対する抵抗であったようだ。マートンという社会学者の分類によると典型的な反逆型逸脱者の一人である。また、ある日私の車のうしろに古ぼけた赤い車をくっつけて駐めた男がいた。赤いスポーツ・シャツにサングラス。これから予備校にフランス語の試験問題を持って行くところだという。自分自身でつくり出したスキャンダルで、自分自身に挑戦し、ついでにデラックスなバスから跳び降りしてしまった男。そしてまた記念祭の時、この男の傍に立っていた一人の卒業生を思う。解雇の通知を受け取り、裁判で争っているというのに、明るい表情でファイヤーの炎を見上げていた逞しい身体つきの航空会社のキャプテン。そのまた傍には、写真をやり、機械をいじり、紙屋をやり、独身の時は独りで、結婚すると奥さんと二人で、そしてやがて子供を抱いて三人で、毎年記念祭になると必ず顔を見せる男がひっそりと蔭のように立っていた。フロムの言う「自由からの逃走」をはかる群集に抗っているようなその生き方。私はつい最近会った女の子の中にも、そのやさしげで頼りない顔になって記念祭の前、徹夜で講堂の天井を這いずり廻って配線をしていた男、コッペパンを噛りながら基地の生態を調査しガリ版をひっかいていた男、ぼんやりした顔で重なものとして心の中にしまい込んできた。髪をふりみだしていつまでも運動部のコーチを続けていた男、青黒い細い顔になって記念祭の前、徹夜で講堂の天井を這いずり廻って配線をしていた男、コッペパンを噛りながら基地の生態を調査しガリ版をひっかいていた男、ぼんやりした顔で入って来てある女生徒への思慕を訴えた男、記念祭の夜遅くなりどうしようもなくなって訪ねて来た女の子、東横ホールでオペラグラスの貸出しのアルバイトをやっていた女の子、京橋警察署の前に坐りこみ頬かむりでシュプレヒコールを叫んでいた男、女……若ものたちはみな、自分自身の塔の頂上に上り、純粋な空気を吸い、力強い研に期待して歌っていた。私も若かった。そして今は余程変ったと思いながら、クラスマッチの華やかすぎるブロック・カラーを眺め、自分自身の中に生じる大きな沈黙と戦いながらこの異端の群が、何年かの間には新しい価値秩序の原型として残って行くことを空頼みにして、なお、反体制的逸脱者の群像を育てようとあがいているのである。共犯者は松俊夫氏であることは言うまでもない。

びしい日本の大衆社会の中で既成の通路には乗りにくい生活と意見を抱いているものたち……私はその「有効性」をはかる時、一体彼らをニヒリズムへの顛落から支えているものは何かとふっと考える。それは、また、「私の」でもあるのだが。

私は彼らの十代の映像を貴